数年前

酒井**元基**（もとき）、宮坂**亜矢子**は同じ高校の同級生。
亜矢子は容姿端麗、成績優秀。バイオリンの英才教育を受けている

元基の友人に**健児**と言うイケメンがいる。
健児は亜矢子に恋をしており、亜矢子は健児の想いに応じ、二人はしばらく交際。
校内のベストカップルという評判。
が、二人は、何もないまま自然消滅。

とある学園祭の準備の期間。元基は亜矢子に打ち明けられる。
亜矢子と元基は付き合うようになった。
元基は健児のこともあり、この交際を誰にも話せずにいた。
事実、二人が付き合っていたことを知っている人間はいなかった。
二人は真剣に恋をした。
卒業後、元基は進学を選ばずフリーター、亜矢子は海外へ留学。

二人は離ればなれになり、音信不通に。

現在。
元基はガソリンスタンドで働きながら、趣味のバンド活動を続ける日々。
店長を務め、それなりに充実した日々を送っている。
亜矢子以来、真剣に付き合った女性はいない。

そしてある日、元基はひょんなことから亜矢子の消息を知る。
なんと週刊誌にスクープされていたのだ。
「皇太子殿下が恋するバイオリニスト」という見出しで。
名前は伏せられ、顔にはモザイクがかかっていたが、そのシルエットは間違いなく亜矢子である。

元基は何年ぶりかに健児と会い、亜矢子の話を。
盛り上がるはずが、健児は何かに怯え、憔悴しきった様子。
「自分は何者かに狙われているらしい」としきりに訴えていた。

一週間後。健児の訃報が届く。風呂場で発作を起こしたらしい。

そして元基の元に無言電話が多発するようになる。
そんなとき一人の男から元基とサシで語りたい、というお誘いが。
過去に元基のガソリンスタンドでバイトをしていた**寛治**である。
とにかくお金のない男で、いつも給料の前借りを頼みにくるような男。
元基がゴハンをおごってあげたことも多々ある。
寛治は
「元基をモチーフにした小説を書きたいから話を聞かせてくれ」
と。

元基の部屋
寛治、座卓に座っている
寛治、ノートとペンで何やらメモる体勢
元基、コーヒーを持って現れる

元基　「はいよ（と、コーヒーを置く）」
寛治　「あざっす！」
元基　「ブラックね」
寛治　「ブラックっす！」

元基、寛治と対面して座る

元基　「で」
寛治　「はい」
元基　「何、話せばいいのよ（照れて）」
寛治　「んー、例えば、店長の若かりし頃の恋愛とか～恋愛とか恋愛とか～」

元基「……」
寛治「（ニヤニヤして）店長の恋愛中心で」
元基「……俺の恋愛？」
寛治「（ニヤニヤして頷く）」
元基「……却下」
寛治「はあ？」
元基「わりい」
寛治「……」
元基「や、そういう話苦手なんだわ。他のにして」
寛治「……（にやにや）ん～」
元基「なんだよ」
寛治「そういう人の恋愛だからこそ……」
元基「……」
寛治「ね？」
元基「……むーり！」
寛治「……（憮然）」
元基「悪いな」
寛治「……（ため息）」
元基「なんか飯作ってやるから。パスタでいいか？」

元基、立ち上がる（パスタ作りに）
寛治、合わせて立ち上がる

元基「ん？」
寛治「飯なんかいいんです」
元基「いや、せっかく来たんだから」
寛治「過去から逃げないで下さい」
元基「は？」
寛治「……今俺に協力しないでどうすんすか！？若い芽を育てるのが、
酒井元基でしょ！？」
元基「……」
寛治「俺はこれにかけてるんです。今日は話しを聞くまで帰りません」

元基　「……」

寛治、座る

元基、立ったまま寛治を見る

元基、寛治の様子を見るように遠くへ座る

元基　「……っつか、お前本気で小説なんか書くの？」

寛治　「もちろんっす」

元基　「……」

寛治　「なんすか」

元基　「そんなこと言ってたか？」

寛治　「……男子たるもの、ほんとに大切なことは、話さないもんです」

元基　「……」

寛治　「店長の恋バナと一緒です」

元基　「……」

寛治、元基を見てボイスレコーダーを出す

元基　「ん？」

寛治　「離れてたら録れないんで」

元基　「録音するのか？」

寛治　「もうしてます」

元基　「……俺のライブの話とか、結構面白いぞ」

寛治　「恋愛の話以外興味ありません」

元基　「……お前、なんか変だぞ？」

寛治　「……」

元基　「宗教か？」

寛治　「（あきれ顔）」

元基、再び寛治の対面に

元基　「寛治、お前の素直なところはな、本当にいい所だけど、何でも信じ

て、変なとこに足突っ込んで、人に迷惑かけるなよ」

寛治　「……」

寛治、元基に顔を近づける

寛治　「店長」

元基　「ん？」

寛治　「俺、知ってんすよ」

元基　「……なにを？」

寛治　「店長、女優かタレントと付き合ってたんでしょ？」

元基　「……は？」

寛治　「誰か知んないっすけど、本名が、『みやさかあやこ』っていう」

元基　「！」

元基、立ち上がる

寛治　「ほら」

元基　「……お前」

ここから↓

寛治、立ち上がる

寛治、ボイスレコーダーを手にする

寛治　「その人とのこと、ちょっと話してくれるだけでいいんですよ」

元基、寛治に詰め寄る

元基　「お前、その話、誰から聞いた？」

寛治　「わ」

元基　「なあ？誰から聞いた？」

元基、ボイスレコーダーを奪う

寛治　「ちょっと」
元基　「……（録音止める）」
寛治　「あ」
元基　「……誰に頼まれたんだ」
寛治　「……いや」
元基　「寛治！！」
寛治　「！」
元基　「話せ」
寛治　「……そんな怒んないで下さいよ」
元基　「いいから話せ、誰に頼まれてここに来たんだ」
寛治　「……」
元基　「おい！」
寛治　「雑誌社です雑誌社！」
元基　「……雑誌社？」
寛治　「なんかどっかの雑誌社の人が、俺の今のバイト先まで来て、店長とみやさかあやこさんのこと聞き出せたら、二十万くれるって」
元基　「……」

元基、窓際へダッシュで駆け寄り、外の様子を見る

元基　「……」
寛治　「こっそり教えてくれませんか？」

元基、寛治の近くへ行く

寛治　「や、その二十万、半分払いますよ」
元基　「……」

元基、寛治を座らせる
寛治、座る

寛治「そんなにムキになることじゃ……」
元基「（遮って小声で強く）いいか！」
寛治「……」
元基「寛治、お前は俺からは何も聞き出せなかった」
寛治「いや」
元基「いいから！」
寛治「……」
元基「俺に殴られて、何も聞き出せなかったって言え」
寛治「……え？」
元基「お前やばいぞ」
寛治「……何が、っすか？」
元基「雑誌社は、宮内庁だ」
寛治「……宮内庁？」
元基「……亜矢子は、宮坂亜矢子は俺の高校の同級生だ」
寛治「タレントになったんすか？」
元基「今皇太子の后候補って言われてるんだよ！」
寛治「……ああ」
元基「そんな秘密知ったら、お前も消されるぞ」
寛治「秘密って」
元基「……」
寛治「やっぱり店長と」
元基「……皇室に過去はあっちゃいけねえんだ」
寛治「まじっすか？」
元基「……」

寛治、ボイスレコーダーを取ろうとする
元基、かわし寛治の頭を叩く

寛治「て」
元基「わかんねえのかお前は」
寛治「だって」
元基「俺の知り合いが消されてるんだよ」

寛治　「……え？」

元基　「死にたいんなら、その雑誌社に話せばいい。酒井元基と皇太子妃候補の宮坂亜矢子は、深く愛し合っていたって」

寛治　「……」